

伊丹三樹彦句碑・伊丹公子句碑

所在地 兵庫県神崎郡福崎町高岡板坂 1912 応聖寺境内

天 界 へ

咲 き つ ぐ

沙 羅 の

花 の い ろ

伊 丹 公 子

碑陰

文字なし

沙 羅 仰 ぐ

口 端 自 ず と

花 白 の 語 三樹彦

碑陰

文字なし



廻轉

「空宇文」

つ 山 羅 小



「空宇文」

市島三千雄詩碑

所在地 新潟県新潟市 西海岸公園内

ひ ど い 海

市島三千雄詩碑

白いペンキが砂に立つて
その灯台がたおれそう——
日本海が信濃川を越えて
漁獵船の柱が河上へ走った
あれも これも
貧弱に北の冬に負けている
そのうち俺は泣いてしまって
あやまった あやまったと
風にお計しを願うた

安藤 冬吉
藤西 信平
伊藤 心蔵
草野 四郎
更科 三郎
村野 伊夫
西脇 伊夫
田中 口
山之 口
山田 口
新島 節
寒河江 末雄
八木 末雄
「海底」 奥
暗王 七青

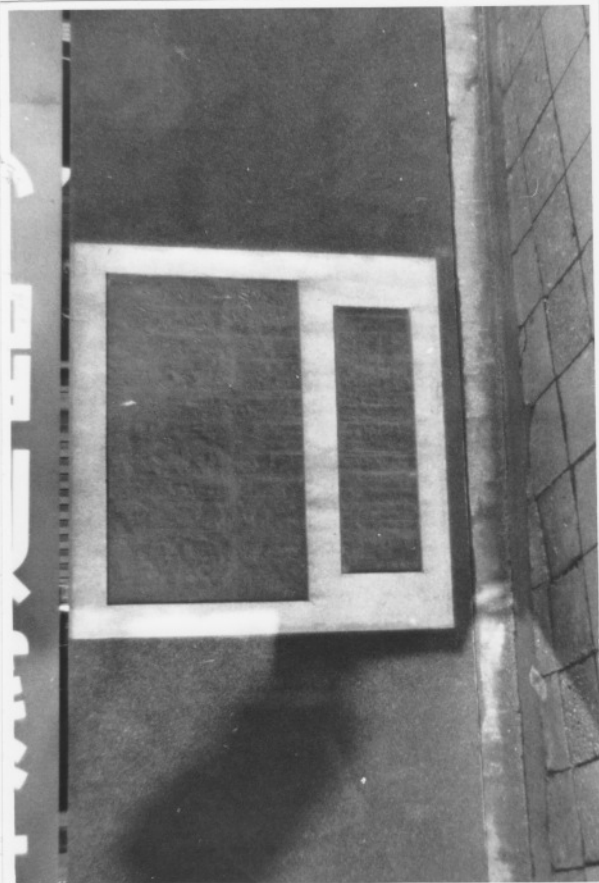
大正十四年作

碑陰

文字なし

(注)公会堂の前の歩道橋の下にあったプレートは現在郷土資料館で保管
西海岸公園の内ものは従って再建されたもの

二月二十日 新潟市古町六番町に生まれ 新潟商業学
日歿す 享年四十歳 墓は新潟市西堀五番町 北山浄



市島三千雄詩碑

所在地 新潟県新潟市 西海岸公園内

市島三千雄詩碑 (横書き)

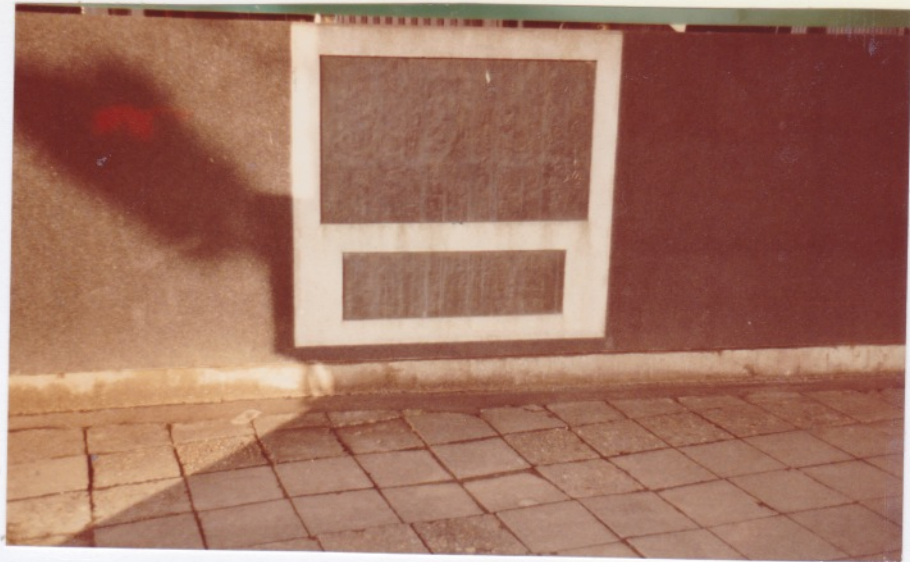
(この下に縦書きで次の詩が書かれている)

ひどい海

白いペンキが砂に立って	安藤 一郎
その灯台がたおれそう――	安西 冬衛
日本海が信濃川を越えて	伊藤 信吉
漁獵船の柱が河上へ走った	草野 心平
あれも これも	更科 源蔵
貧弱に北の冬に負けている	村野 四郎
其のうち俺は泣いてしまって	西脇順三郎
あやまった あやまったと	田中伊左夫
風にお許しを願うた	山之口 猥

大正十四年作

新島 節
寒河江真之助
八木 末雄
「海底」同人
昭和三十七年三月
碑陰
文字なし



瀬一 瀬定

アの立の邸本キレハ白



瀬一 瀬定

丁字半文

(注) 公会堂の前の歩道橋の下にあったプレートは現在郷土資料館で保管
西海岸公園内のものは従って再建されたもの

略歴

市島三千雄 明治 40 年 11 月 20 日 新潟市古町 6 番町に生れる 新潟商業学校中退
昭和 23 年 4 月 6 日歿す 享年 40 歳 墓は新潟市西堀 5 番町 北山浄光寺墓地にある

新浮梁政記念館 重文



五木の子守唄記念碑

所在地 熊本県人吉市球磨川べり 織月城入口

おどまはんぞり

はんぞり

はんから

そきやおらんと

はんがはよくりや

はよもどる

五木の子守唄とよばれ 全国
民に愛唱されている歌謡曲は
もと球磨盆地の村々で 年期奉
公の子守娘がうたいひろめた伝
承の民謡である いつの頃 い
づれの乙女が歌い出たか もと
より知るよしもないが いまこ
こに歌碑をきざみ これら無名
の詩人音楽家たちに永く心の花
束をささげよう 勝清撰

碑陰

市民の浄財により

昭和二十九年十月建之



五木の子守唄記念碑

所在地 熊本県人吉市 球磨川べり 織月城入口

おどまぼんぎり

ぼんぎり

ぼんから

さきやおらんと

ぼんがはよくりや

はよもどる

(この下に次の文章が縦書きで書かれている)

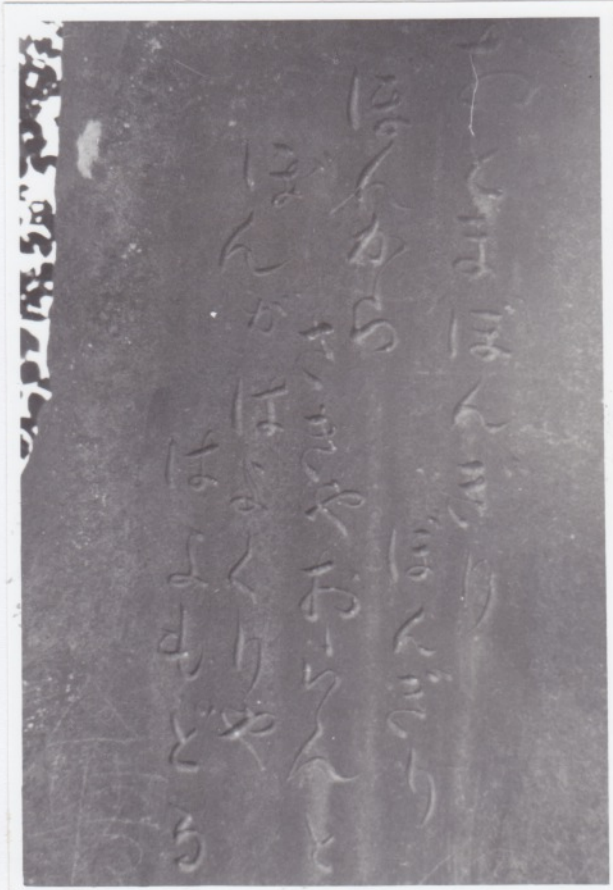
五木の子守唄とよばれ 全国
民に愛唱されている歌謡曲は
もと球磨盆地の村々で 年期奉
公の子守娘がうたいひろめた伝
承の民謡である いつの頃 い
づれの乙女が歌い出たか もと
より知るよしもないが いまこ
こに歌碑をきざみ これら無名
の詩人音楽家たちに永く心の花
束をささげよう 勝清撰

碑陰

市民の浄財により

昭和二十九年十月建之

口人魁具

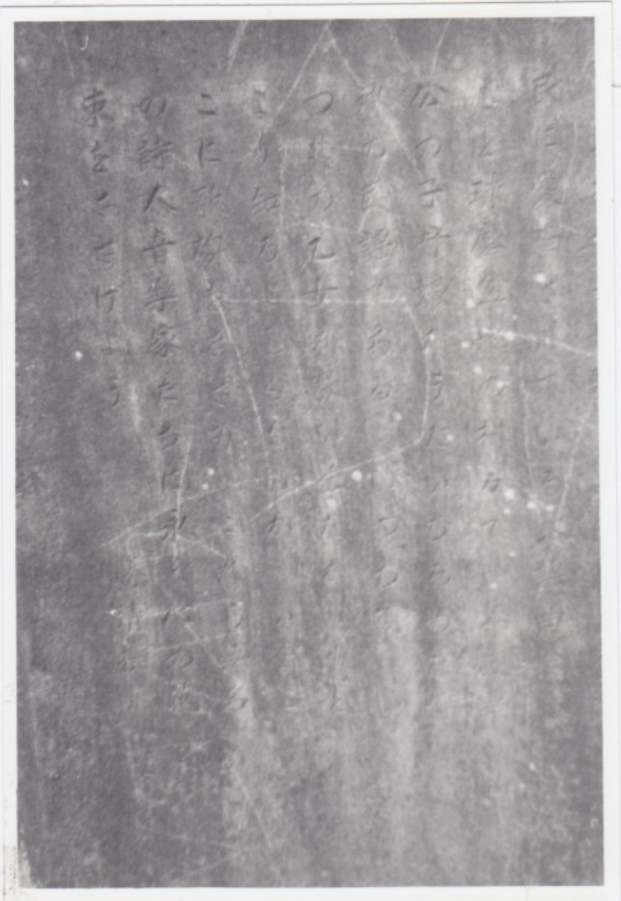


の心く木コさ式家楽音人韓の
一 魁新朝 ともちちき東

翻轉

でもコ棋者の男市

玄聖具十平六十二味部



伊藤永之介文学碑

所在地 秋田県秋田市土崎寺内大畑 護国神社裏側

山美しく

人貧し

伊藤永之介

碑陰

故伊藤永之介氏は明治三十六年秋田市に生まれた二十二才で上京。昭和六年頃の東北の大凶作に刺激され農民小説を書きはじめ以来一貫して郷土の農村に取材し「梟」「鶯」等の名作を生み文学界に独自の地歩をきずいた。終生農民を熱愛し晩年も旺盛な創作の傍ら日本農民文学会長として活躍した。

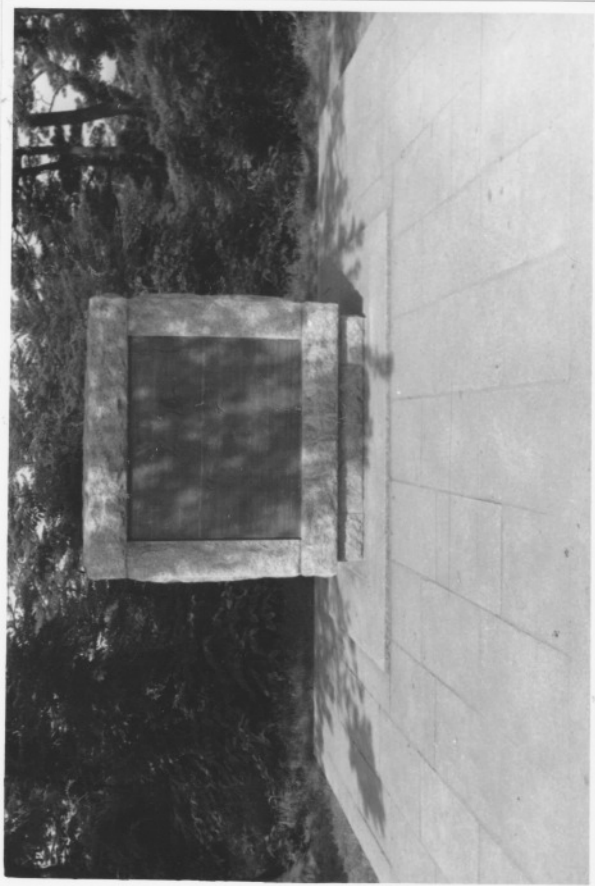
昭和三十四年七月二十六日五十五才で永眠。ここに生前の業績をたたえ文学碑を建立する。

昭和三十五年七月二十日

伊藤永之介文学碑建設委員会

略歴

伊藤永之介 本名 栄之助
明治三十六年十二月二十二日 秋田市西根小屋町(現中通五丁目)に生まれる。市立中通小学校、高等学校を卒業。昭和三十四年七月二十六日歿す。享年五十五歳。墓は秋田市寺内町八橋下八橋八十七 全良寺墓地にある。



伊藤永之介文学碑

所在地 秋田県秋田市土崎寺内大畑 68 護国神社横

山美しく

人貧し

伊藤永之介

碑陰

故伊藤永之介氏は明治三十六年
秋田市に生まれた 二十二才で
上京 昭和六年頃の東北の大凶
作に刺激され農民小説を書きは
じめ 以来一貫して郷土の農村
に取材し 「梟」「鶯」等の名作
を生み文学界に独自の地歩をき
ずいた 終生農民を熱愛し晩年
も旺盛な創作の傍ら日本農民文
学会長として活躍した
昭和三十四年七月二十六日五十
五才で永眠 ここに生前の業績
をたたえ文学碑を建立する
昭和三十五年七月二十六日

伊藤永之介文学碑建設委員会

略歴

伊藤永之介 本名 栄之助 明治 36 年 11 月 21 日 秋田市西根小屋町
(現中通 5 丁目) に生れる 市立中通小学校高等科を卒業 昭和 34 年
7 月 26 日歿す 享年 55 歳 墓は秋田市寺内町八橋下八橋 87 全良寺
にある



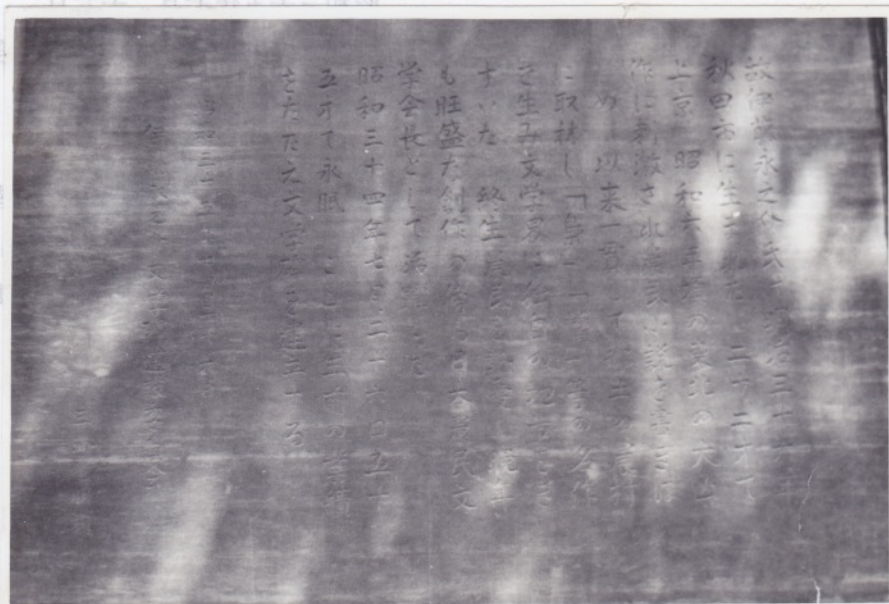
山
人

創館



平
文
十
期

昭和十四年七月二十一日



昭和十四年七月二十一日

伊藤 整文学碑

所在地 北海道虻田郡豊浦町礼文華海岸美の岬 文学碑公園

伊 藤 整 随 筆 碑

五月の初め頃、私は噴火湾の沿岸を
とおつて函館の方から札幌への汽車に
乗った。(中略)
汽車初めて乗るこの長輪線という海沿いの
風景が、風景そのものの楽しさで眼
に映った。窓からの風景をたのしむことのでき
る汽車に乗ったことを、私は珍しいと思つた。
静狩のトンネルの話は以前に聞いていた。それが長さ
において北海道一とか全国一とかいうことであつた。こ
の線の起点である長万部からすぐ、この有名なトンネル
に來た。(中略)
この線に沿うた土地は北側に有珠火山などの山を負い、
南は暖い噴火湾に面している。北海道でも一番暖い
土地であるという。汽車が東方室蘭を指して進むにつれ
て、暖い土地という感じがよく出ている。静狩の崖を過
ぎると麦は秋播きのものがよく成育している。札幌、小
樽附近に較べてその成育よりはまことに早い。なだらかな
丘が起伏しながら左方の高地から右手の海岸に続き、
その所々岩が奇怪な形で突き出ているのが、やっぱり
火山の裾野地帯であることを思わせる。(中略) 右側には、
海が近くなつたり遠くなつたりしながら続いているが、
湾内の水というのは沼のような感じで静かだ。

碑陰
文字なし



昭和六十二年七月建立
豊浦町教育委員会

略歴

伊藤 整（ひと） 明治三十八年一月大
日 北海道松前郡炭焼沢村に生
まれ、小樽高商卒業、東京商大
中退。昭和四十四年十一月十五日歿す。
享年六十四歳。法名 海照院釋整願。
墓は東京都東村山市萩山、小平
霊園 四区九側三六番にある。

伊藤整文学碑

所在地 北海道虻田郡豊浦町礼文華海岸 美の岬 文学碑公園

伊藤整随筆碑

五月初の頃、私は噴火湾の沿岸を
とおって函館の方から札幌への汽車に
乗った。(中略)

初めて乗るこの長輪線という海沿いの
汽車の風景が、風景そのものの楽しさで眼
に映った。窓からの風景をたのしむことのでき
る汽車に乗ったことを、私は珍しいと思った。

静狩のトンネルの話は以前に聞いていた。それが長さ
において北海道一とか全国一とかいうことであつた。こ
の線の起点である長万部からすぐ、この有名なトンネル
に來かゝつた。(中略)

この線に沿うた土地は北側に有珠火山などの山を負い、
南は暖い噴火湾に面しているので、北海道でも一番暖い
土地であるという。汽車が東方室蘭を指して進むにつれ
て、暖い土地という感じがよく出ている。静狩の崖を過
ぎると麦は秋播きのものがよく成育している。札幌、小
樽附近に較べてその成育ぶりはまことに早い。なだらかな
丘が起伏しながら左方の高地から右手の海岸に続き、
その所々に岩が奇怪な形で突き出ているのが、やっぱり
火山の裾野地帯であることを思わせる。(中略)右側には
海が近くなったり遠くなったりしながら続いているが、
湾内の水というのは沼のような感じで静かだ。

碑陰

文字なし

昭和六十二年七月建立

豊 浦 町

豊浦町教育委員会



伊藤 整
随筆碑
↓
伊藤 整
随筆碑
↓
伊藤 整
随筆碑
↓



伊藤整文学碑

所在地 北海道小樽市塩谷町 ゴロダの丘上

伊藤整文学碑 (縦書き)

北見恂吉書

この下に縦書きで次の詩が書かれている

海の捨児

伊藤 整

私は浪の音を子守唄にして眠る
騒がしく 絶間なく
繰り返して語る灰色の年老いた浪
私は涙も涸れた凄愴なその物語りを
つぎつぎに聞かされてゐて眠ってしまふ

私は白く崩れる浪の穂を越えて
漂ってゐる捨児だ
私の眺める空には
赤い夕映雲が流れてゆき
そのあとへ星くづが一面に撒きちらされる
あゝ この美しい空の下で
海は私を揺り上げ 揺り下げて
休むときもない

左側面

昭和四拾四年拾壹月拾五建之

伊藤整文学碑建立期成会

施工 株式会社正和土建

栗林工務店

石工 館田秀一

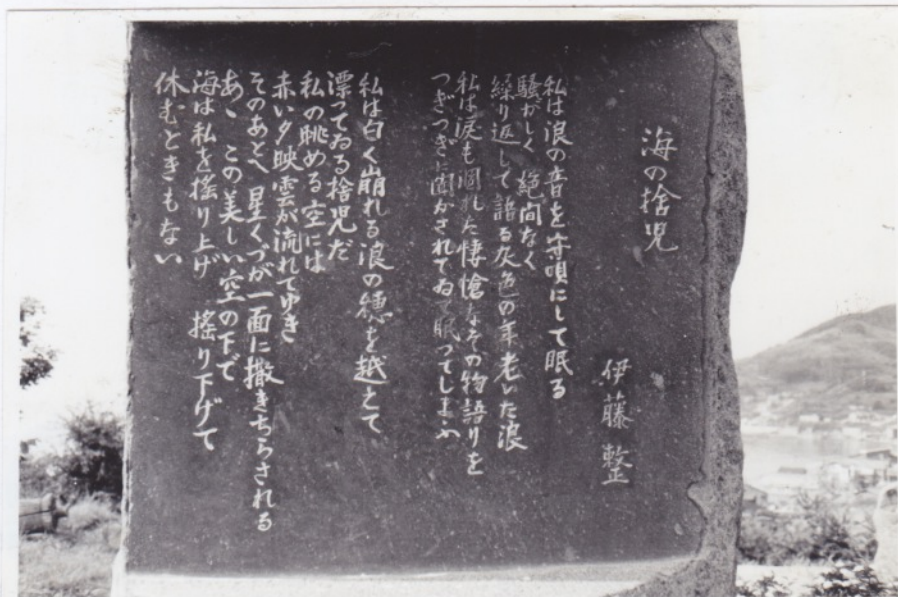
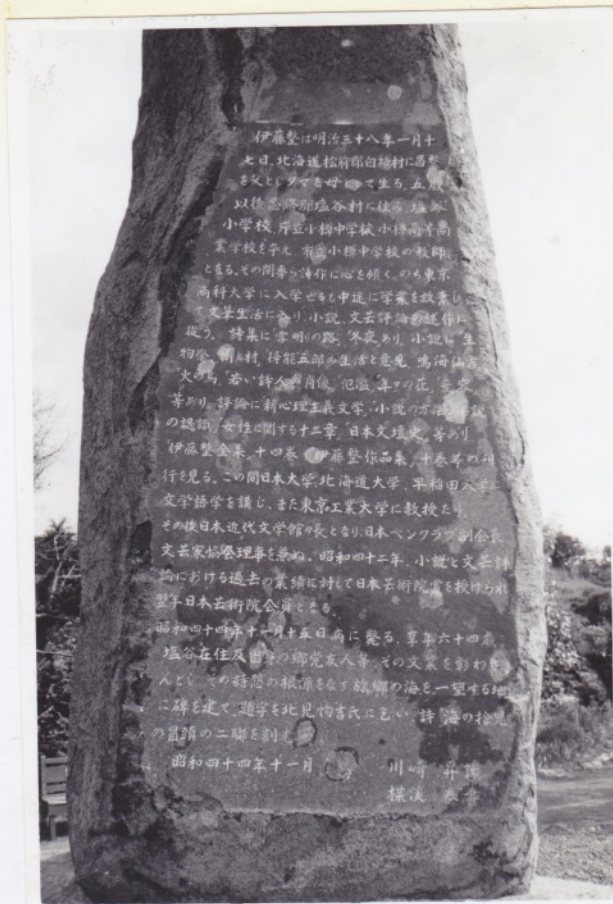
石材寄贈 木部英次

副碑(横書き)

文学碑建立発起人

15名列記(略)

(碑陰は次頁に続く)



碑陰(横書き)

伊藤整は明治三十八年一月十七日、北海道松前郡白神村に昌整を父としタマを母として生る。五歳以後忍路郡塩谷村に住み、塩谷小学校、庁立小樽中学校、小樽高等商業学校を卒え、市立小樽中学校の教師となる。その間専ら詩作に心を傾く。のち東京商科大学に入学せるも中途に学業を放棄し、て、文筆生活に入り、小説、文芸評論の述作に従う。詩集に「雪明りの路」「冬夜」あり。小説に「生物祭」「街と村」「得能五郎の生活と意見」「鳴海仙吉」「火の鳥」「若い詩人の肖像」「氾濫」「年々の花」「変容」等あり。評論に「新心理主義文学」「小説の方法」「小説の認識」「女性に関する十二章」「日本文壇史」等あり。「伊藤整全集」十四巻、「伊藤整作品集」十巻等の刊行を見る。この間日本大学、北海道大学、早稲田大学に文学語学を講じ、また東京工業大学に教授たり。その後日本近代文学館々長となり、日本ペンクラブ副会長文芸家協会理事を兼ね。昭和四十二年、小説と文芸評論における過去の業績に対して日本芸術院賞を授けられ、翌年、日本芸術院会員となる。昭和四十四年十一月十五日病に斃る。享年六十四歳。塩谷在住及出身の郷党友人等、その文業を彰わさんとし、その詩想の根源をなす故郷の海を一望する地に碑を建て、題字を北見恂吉氏に乞い、詩「海の捨児」の冒頭の二聯を刻む。

昭和四十四年十一月

川崎 昇識
榎 溪 泰書

海の捨児

伊藤 整

私は浪の音を耳に聞いて眠る
 騒がしく絶向なく
 緑り返して語る灰色の年老いた浪
 私は涙も潤れた懐懐なその物語りを
 つきつきに聞かされて白く眠つてしまふ
 私は白く崩れる浪の穂を越えて
 漂つてゐる捨児だ
 私の眺める空には
 赤い夕映雲が流れてゆき
 そのあと、星くづが一面に撒きちらされる
 あ、この美しい空の下で
 海は私を揺り上げ、揺り下げて
 休むときもない

伊藤整文学碑文



伊藤柏翠句碑・高浜虚子記念碑

所在地 山梨県富士吉田市小明見三丁目 西方寺境内

大富士の

柏翠

碑陰

伊藤柏翠

暮れ去りてより

ホトトギス同人

花鳥主幸

春の月

平成三年九月二十九日

建立

湖明見会

冬扇会

高浜虚子先生

碑陰

昭和叁叁年秋西方寺にて

御筆塚

伊藤柏翠書

爽やかに

碑陰

勝俣泰享

山荘守りと

ホトトギス同人

平成三年九月二十九日

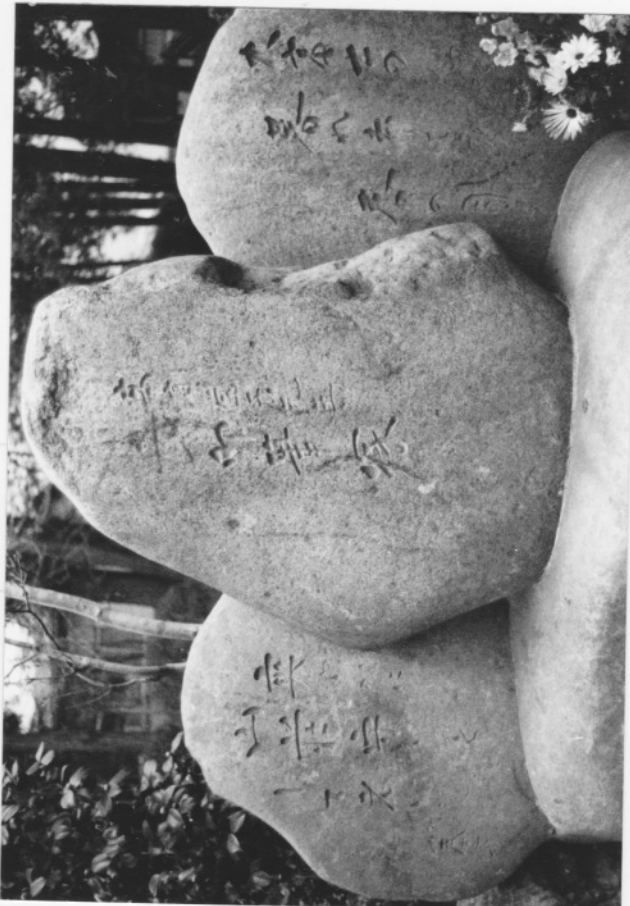
建立

湖明見会

冬扇会

して老いし

享



伊藤柏翠句碑・高浜虚子記念碑

所在地 山梨県富士吉田市小明見 205 西方寺境内

大 富 士 の 柏 翠

暮 れ 去 り て よ り

春 の 月

碑陰

伊 藤 柏 翠

ホトトギス同人

花鳥主宰

平成三年九月二十九日

建立

湖月見会

冬 扇 会

高 浜 虚 子 先 生

御 筆 塚

碑陰

昭和六十三年秋西方寺にて

伊 藤 柏 翠 書

爽 や か に

山 莊 守 り と

し て 老 い し

泰 享

碑陰

勝 俣 泰 享

ホトトギス同人

平成三年九月二十九日

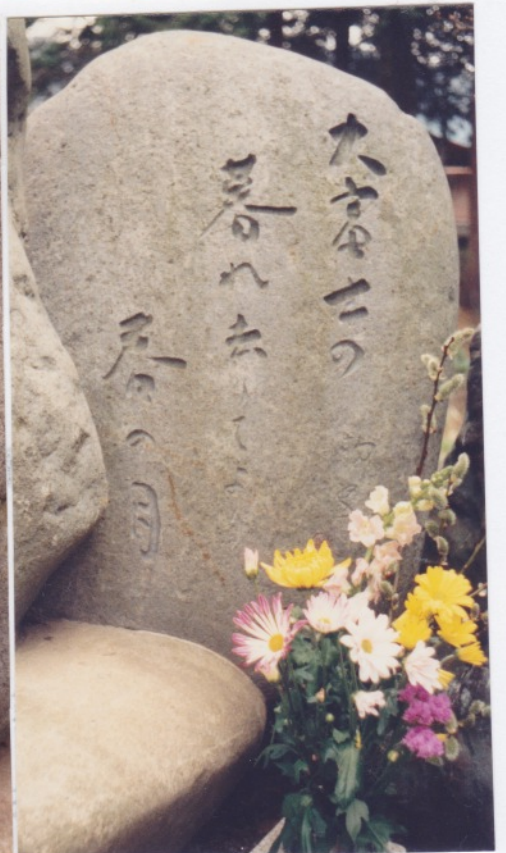
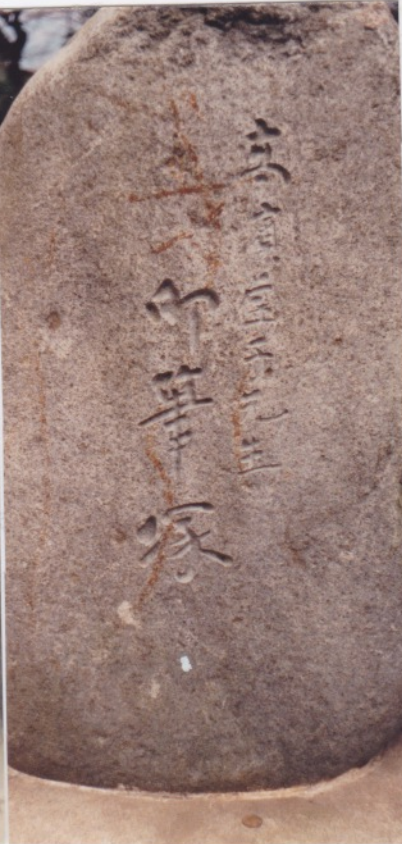
建立

湖月見会

冬 扇 会



龍母
西



碑陰
←

伊藤柏翠句碑

所在地 長野県茅野市興藝科 明治温泉の前

滝しぶき龍の面を逆のぼる

柏 翠

龍よりも

滝垂れてのたりけり

土筆坊

二日月は

龍潭に馴れよく眠れ

明司

碑陰

昭和五十六年八月建立

明治温泉

米倉明司

各地

花鳥会



伊藤柏翠句碑

所在地 長野県茅野市北山奥蓼科 4734 「明治温泉旅館」前

瀧 し ぶ き 瀧 の 面 テ を 逆 の ぼ る

柏 翠

瀧よりも

滝壺昏れてゐたりけり

土筆坊

二日月は

瀧音に馴れよく眠れ

明司

碑陰

昭和五十六年八月建立

明 治 温 泉

米 倉 明 司

各 地

花 鳥 会

母 蘭 林 翠 回 軒

前「龍泉泉部部」

そ の 壺 ぎ て



お目
録二音節



伊藤柏翠・高濱虚子・森田愛子句碑

所在地 福井県坂井郡三国町滝谷一七五 瀧谷寺境内

落葉踏み又斯る日の

柏翠

ありやなし

迎へ傘三国時雨に逢ひにけり

虚子

啄木鳥や山門までの

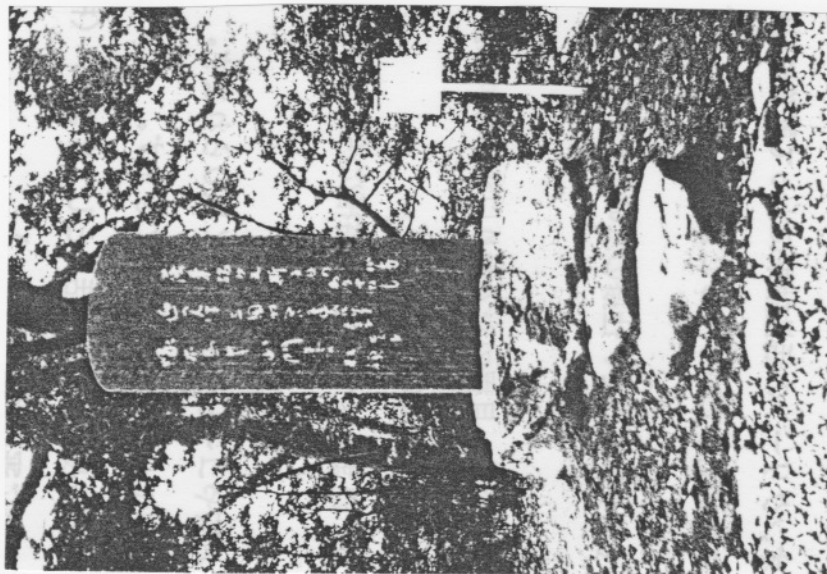
愛子
杉襖

碑陰

昭和二十年十一月五日、高濱虚子先生三国町森田
愛子居を訪ひ、同日瀧谷寺に参詣、帰路時雨に逢
ふ。昭和六十二年、伊藤柏翠先生喜寿に當り、こ
の句碑を建つ。

福井県花鳥俳句会

福井県ホトトギス会



伊藤柏翠・虚子・愛子句碑

所在地 福井県坂井市三国町滝谷 1-7-15 瀧谷寺境内

落葉踏みて又斯る日の 柏翠

ありやなし

迎へ傘三国時雨に逢ひにけり

虚子

啄木鳥や山門までの 愛子

杉襖

碑陰

昭和二十年十一月五日、高濱虚子先生三国町森田
愛子居を訪ひ、同日瀧谷寺に参詣、帰路時雨に逢
ふ。昭和六十二年、伊藤柏翠先生喜寿に當り、こ
の句碑を建つ。

福井県花鳥俳句会

福井県ホトトギス会

伊藤柏翠句碑・高濱虚子句碑・森田愛子句碑

所在地 福井県坂井市三国町 東尋坊 遊歩道

日本海秋潮となる頃淋し

柏 翠

碑陰

虚子愛子句碑を移すにあたり、こゝに柏翠句碑を併せ建て物語「虹」を偲ぶ

昭和四十年六月

東尋坊句碑建立有志代表

米野 耕人

坪内美佐尾

野菊むら東尋坊に咲きなだれ

虚 子

碑陰

文字なし

雪国の深き底や寝待月

愛 子

碑陰

表記の文字は愛子の自筆短冊を拡大せるもの

にして 東尋坊の句としては左の作あり

吾が歩む日傘の蔭の野菊濃し 愛子

昭和二十五年十一月 柏翠誌

伊藤柏翠句碑・高濱虚子句碑・森田愛子句碑

所在地 福井県坂井郡三国町 東尋坊遊歩道

日本海秋潮となる頃淋し

柏翠

柏翠句碑碑陰

虚子愛子句碑を移すにあたりこゝに柏翠句碑を併せ建て物語「虹」を偲ぶ

昭和四十年六月

東尋坊句碑建立有志代表

米野耕人
坪内美佐尾

野菊むら東尋坊に咲きなだれ

虚子

虚子句碑碑陰

文字なし

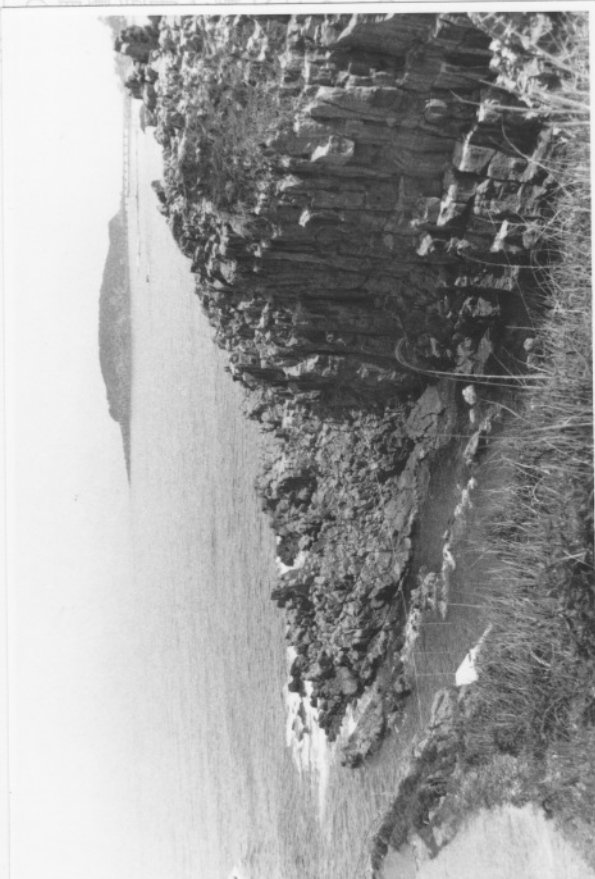
雪國の深き底や寝侍月

愛子

愛子句碑碑陰



東尋坊の
歩む



井上剣花坊川柳碑

所在地 神奈川県鎌倉市山の内倉地 建長寺 鐘楼脇

咳 一 つ

剣花坊

碑陰

木が茂っていて
近よれず不明

きこえぬ

中を

天皇旗

略歴

井上剣花坊 本名 幸一 明治三年六月三日 長門国萩市に生まれる 漢学塾で
学ぶ 昭和九年九月十一日歿す 享年六十四歳 法名 剣花院歸幸道一居士 墓は神
奈川県鎌倉市山の内九二建長寺塔頭 正統院墓地にある



井上剣花坊川柳碑

所在地 神奈川県鎌倉市山ノ内8 建長寺 鐘楼脇

剣花坊

咳一つ

きこえぬ

中を

天皇旗

碑陰

木が茂っていて近寄れず 不明

略歴

井上剣花坊 本名 幸一 明治3年6月3日 長門国萩市に生れる 漢学塾で学ぶ
昭和9年9月11日歿す 享年64歳 法名 剣花院歸幸道一居士 墓は神奈川県
鎌倉市山ノ内92 建長寺塔頭 正統院墓地にある



共土喚芥

川原村 張吉河

へ一廻

こち

き中

皇牙



関不

弘幸
景川

瀬



井上剣花坊川柳碑

所在地 静岡県下田市柿崎 三島神社入口

剣花坊

碑陰

文字なし

お吉

下田

の

松陰と

裏

表

副碑

建碑由来

川柳中興の祖井上剣花坊師は屢々下田に遊びこの句を残す

碑石寄贈 山口県萩市長

昭和四十九年九月十二日 川柳黒汐吟社同人建之

句碑建立にあたり汎く全国の川柳人各位より多大な御芳志を戴
き衷心より謝意を表す



井上劍花坊川柳碑

所在地 静岡県下田市柿崎町 三島神社入口

劍花坊

お吉下田

松陰と の

裏表

碑陰

文字なし

副碑

建碑由来

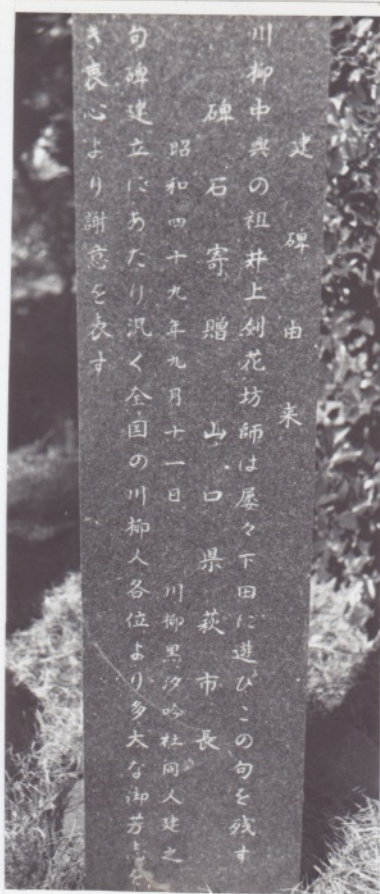
川柳中興の祖井上劍花坊師は屢々下田に遊びこの句を残す

碑石寄贈 山口県萩市長

昭和四十九年九月十一日 川柳黒汐吟社同人建之

句碑建立にあたり汎く全国の川柳人各位より多大な御芳志を戴き衷心より謝意を表す

川柳中興の祖井上剣花坊師は屢々下田に遊びこの句を残す



来 由 碑 墓

十数年前のこむ張コ田不々墓に頼り頼り松陰土礼居の興中柳川

員 市 蔭 黒 口 山 観 密 不 柳

